

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02236

研究課題名(和文)多宗教・多文化環境下における「霊的ケア」の研究

研究課題名(英文)A study on "spiritual care" in a multi-religious and multi-cultural environment

研究代表者

関谷 直人 (Sekiya, Naoto)

同志社大学・神学部・教授

研究者番号：80288597

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：多文化・多宗教社会の一つであるハワイの病院を対象とした調査によって、グローバル化の影響の下で、やがて日本が行き着くであろう多文化・多宗教共生社会にある病院施設などで必要とされる霊的なケアを構築するための土台が明らかになった。まず、それは「尊敬」(respect)であり、それは他宗教に対するそれであり、同時に全ての患者個人に対するものであることがわかった。さらに、それらを実現するためには、医療者側のスタッフではない、霊的ケア、しかも包括的(inclusive)なケアの専門訓練を受けたハワイにおける「チャプレン」(病院付き牧師)のような存在が日本の病院にも不可欠であることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで比較的「単一的」社会構造を維持してきた我が国においては、医療現場におけるケアも、多くの場合、「日本人」の患者を前提としてケアのシステムが構築されてきた。しかし、我が国が多文化・他宗教共生社会へとシフトする際には、我が国の病院施設におけるケア提供の現場においても、ハワイの病院で実施されているような多文化・他宗教の背景を持つ患者を対象とするケアのシステムの構築が求められるようになる。その一つの例が今回の調査対象となった欧米におけるキリスト教を主体とした「チャプレン」(病院付き牧師)の存在である。本研究はそこに、日本の病院施設が将来にわたり構築するべきケアの基礎モデルを提供するものである。

研究成果の概要(英文)：This survey of hospitals in Hawaii, which is one of the multicultural and multireligious societies, has revealed the foundation for constructing the alleged spiritual care in a multicultural and multireligious symbiotic society where Japan will eventually arrive under the influence of globalization. First, it turned out to be "respect", that for other religions, and at the same time for every individual patient. Furthermore, in order to realize that, not only staffs on the medical staff side, but someone like "chaplains" (a pastors workin in a hospital) in Hawaii who has undergone specialized training in spiritual and inclusive care will be also needed for Japanese hospitals.

研究分野：キリスト教実践神学

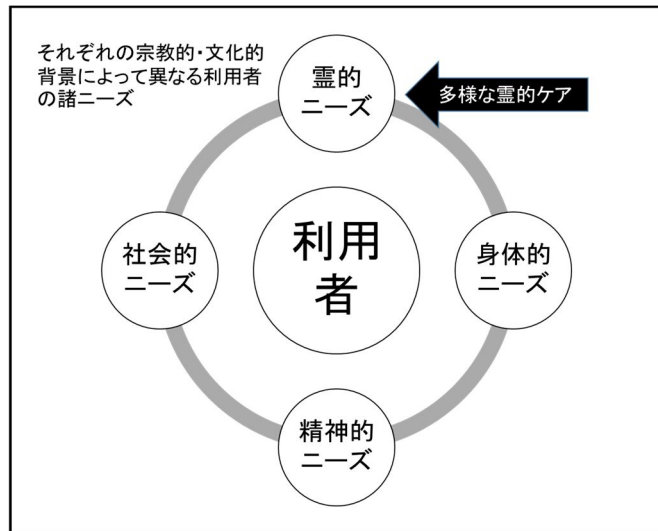
キーワード：霊的ケア キリスト教 病院 チャプレン グランデッドセオリー CPE

### 1. 研究開始当初の背景

欧米で長い歴史的背景を持つ“Spiritual Care”という語は、1980年代頃から「スピリチュアルケア」や「霊的ケア」という日本語があてられ、我が国にも紹介されてきた。とりわけ1990年代初頭以降、それ以前から存在していたキリスト教系ホスピス以外にも、多くの無宗教系ホスピスが全国で設立されるに至り、それにつれて我が国における「霊的ケア」が試行的に導入されてきた。また、それに連動する形で、その意味するところや、実施状況についての様々な調査・議論がなされてきた(窪寺、A.デーケン、柏木、藤井)。他方、キリスト教的背景を持って我が国に導入されてきた「霊的ケア」を、それとは異なる宗教的・文化的土壌を持つ日本社会で提供することの困難さが指摘されており(窪寺、キップス)、その解決策が求められてきた。

また、我が国のグローバル化に伴い、近年、在留外国人の数は大幅に増加してきた。それにつれて、国内の医療機関を利用する外国人も増加しているが、個々の病院がそうした変化に対応することは容易ではない。そこには「言葉の壁」をはじめとする様々な問題が予想されるのであるが、とりわけ在留外国人の文化的・宗教的背景によって求められる多様な「霊的ケア」の提供については、ほとんど手付かずの状態である。近い将来、我が国の医療機関においても、そうした患者の多様な「霊的ニーズ」に対応していく必要が出てくることと予想される中で、我が国においても多宗教・多文化に対応した「霊的ケア」のモデルを構築することは喫緊の課題であると考えられる。

(図1)



### 2. 研究の目的

本研究においては、すでに多文化共生社会を醸成してきたと言える米国においても、とりわけ多様な文化形成をしてきたハワイの12の医療施設を調査対象として、そこで提供されている「霊的ケア」の現状について量的・質的調査を行い、以下の点について明らかにする。

(1) ケアの提供者であるチャプレンたちが利用者に対して提供しているケアについて、運用の実際や方法論を明らかにする。

(2) 多様な宗教的・文化的背景を持った利用者に対してどのような配慮を行ってきたのかを明らかにする。

(3) こうしたケアの背景に存在する宗教的・哲学的フレームワークを明らかにする。

図1

また、日本にある3の医療施設(いずれもホスピスを有し、「霊的ケア」の提供をうたっている施設)を調査し、以下の点について明らかにする。

(1) それらの施設で提供されている「霊的ケア」について、その運用の実際や方法論を明らかにする。

(2) 宗教的・文化的背景の異なる利用者に対して「霊的ケア」の提供してきたケースがあれば、それを拾い上げ、その際に提供の現場がどのような課題意識を持ったかについて明らかにする。

(3) 日本における「霊的ケア」の背後に存在する宗教的・哲学的フレームワークを明らかにする。

以上の調査で明らかになったことを元にして、以下の点について明らかにする。

(1) 我が国が今後遠からず多宗教・多文化社会へと移行していく現実を見据えたときに、現在の日本の医療施設における「霊的ケア」が内包している課題を明らかにする。

(2) 来るべき多宗教・多文化時代に対応することのできる「日本型霊的ケア」の基礎モデルの構築・提言を行う。

### 3. 研究の方法

オアフ島を中心とした“Pacific Health Ministry”の宣教域内にある複数の医療施設・老人福祉施設のチャプレンを対象として、そこで多文化・多宗教を背景とした施設利用者に対して、どのような「霊的ケア」が提供されているかについて、現地において主に質的調査を行うと同時に、日本国内においては、日本バプテスト病院などのキリスト教病院施設のチャプレンに対して同様の調査を行った。その調査結果の分析について、英語のインタビューについてはテープ起こしの後、翻訳を行った。調査結果の分析についてはグラン

デッドセオリーを用いた分析分析を試みた。そこから得られたハワイの病院のチャプレンが実施している多宗教・多文化を背景とした霊的ケアのエッセンスを、日本のキリスト教病院で実施されている霊的ケアの現状とを照合することで、日本の医療施設において、多文化・多宗教を背景とした施設利用者に対して、どのような「霊的ケア」が提供できるかのモデルを構築することを目指した。

#### 4. 研究成果

##### (1) ハワイの病院における霊的ケアの本質

###### 「尊敬」(Respect)

ハワイのチャプレンに対するインタビューから明らかになったことは(その全てがキリスト教の牧師有資格者であったのだが) ハワイという土地柄、彼らが所属している病院には、仏教徒やユダヤ教徒などの「異教」の患者だけでなく、同じキリスト教に属していながらも「モルモン教」「ものみの塔」など「異端」として扱われている患者など、非常に多様な宗教的背景を持った患者をそのケアの対象としていることが明らかになった。また、人種的にも多様な人々が居住しており、オアフ島では、「アイランダー」と一般に呼ばれているハワイ人、及びポリネシア系の住民から、日系人などのアジア人、メキシコ系などのヒスパニック、アフリカンアメリカン、そして白人まで、まさにオアフ島は「人種のるつぼ」であるが、そんな多様な人々が、1,546 平方 Km という狭い島に住んでいるので、チャプレンの現場目線でみた「多様性」はアメリカ本土の比ではない。そのような宗教的・文化的に多様な患者に対して彼らが霊的ケアを実施する際の根本原理は「尊敬」であると、インタビューの調査結果からは読み取れた。彼らが多宗教・多文化の患者に対してケアを行う際に(ケア・ギバーである彼らは一部の例外を除いてほぼすべてキリスト教の牧師の有資格者であり、神学教育において CPE<Clinical Pastoral Education>を最低 3 ユニット以上受講しているキリスト教の宗教者でありながら) 患者個々人が信じている多様な宗教に最大限の敬意を払い、尊敬を払う姿勢であることがわかった。ここではチャプレンはいわば「宗教コンシェルジュ」、あるいは「宗教コーディネーター」として機能しており、患者個々の宗教的ニーズに応じて、ときにはイスラムのイマームと、ときには仏教の僧侶と、あるいはユダヤ教のラビと連絡をとり、彼らを患者と繋いでいるのである。

###### 「パラメディカル」以上の存在

ハワイの病院では、昨今日本の病院でも言われ始めた、「パラメディカル」あるいは「コメディカル」との連携はすでに定着した感がある。チャプレンはその中にもあっても、霊的ケアを行う上での中心的な役割を果たしており、病院内での扱いも決して軽いものではない。シニア・チャプレンは医師や看護師からも尊敬を集めており、定期的に行われる倫理委員会には常駐メンバーとして参加する。いわゆる「全人医療」という概念はここでは、かなり真剣に受け止められており、その意味では身体的なケアだけでなく、個々の宗教的・霊的ニーズに応じたケアをするという役割において、チャプレンたちは病院の中で確固たる位置を占めていることがわかった。直接的に収益につながらないチャプレンプログラムが、病院の経営的側面と矛盾しないと病院の経営者サイドが考えていることも興味深い。「全人医療」との関連でまさに「トータル」に病院を捉えた場合には、こうした全方向的ケアを実施することのできるチャプレンの働きは決して無駄であるとは考えられていないようである。

###### 宗教的リソース・マネージャー

上述した多様な宗教的ニーズに応えるものとしてのハワイのチャプレンは、地域の宗教リソースのマネージャーとしての機能も果たしているようである。チャプレンの能力の一つに、「いかに幅広い宗教者とパイプを持っているか」というものがある。彼らは患者の宗教のニーズを知るや、自分の手の中にある「宗教リソース」を十全に駆使して患者のニーズに応えようとするのである。このようなことを実現するためには、チャプレンの 述べた「他宗教に対する尊敬」が不可欠であり、それはいわゆる「宗教的寛容」を凌駕するレベルのものであった。

##### (2) 日本のキリスト教病院におけるチャプレンプログラムの現状

###### チャプレンの置かれた立場

我が国におけるキリスト教徒の占める割合が、日本全人口の 1 パーセント未満である状況もあって、まず日本の病院でチャプレンプログラムを有している病院はわずかであり、キリスト教を背景としない病院でそうしたプログラムを持っているのは(仏教系のビハラーを除けば) ほぼ皆無と言っていい状況である。それであるので、基本的に宗教的ケアや、「霊的ケア」を施す担い手そのものがアメリカの病院に比べて圧倒的に少ないのが現状である。

今回の調査対象となる日本のキリスト教病院では、ハワイの病院と同じく多くの場合「全人医療」を病院のポリシーとしてあげており、それぞれの病院に所属す

るチャプレンが患者に対して霊的ケアを行っている。キリスト教病院だからといっても、日本の宗教環境を鑑みると、それほどの数の「クリスチャン医療従事者」が働いているわけではないので、牧師であるチャプレンの病院での地位は総じて高いものとは言えない。ハワイの病院で感じられた医療従事者らのチャプレンに対する尊敬もここでは必ずしも同じことが言えない。「チーム医療」という掛け声の下で、そうした病院でもチャプレンの働きを大切にしている場面は多いのであるが、診療報酬の対象外ということもあり、なかなかハワイの病院で見られたような「トータルでは収支としてなりたっている」という見方はされにくいようである。

#### 宗教的多様性

このことについては、多様性はあるものの基本的に「キリスト教世界」に属するハワイの医療施設と、キリスト教が圧倒的マイノリティであり、海外の宗教研究者から「信仰を持たない人々の国」とみなされることの多い日本の病院でのチャプレンの働きは好対照であった。確かに組織体としての宗教団体に所属することは嫌う日本人ではあっても、病院で出会う患者の多くは「仏教徒」を標榜している。その中であっては、キリスト教の牧師であるチャプレンのほうが少数者なのである。その点で、ハワイのような「キリスト教世界」に属する病院と比較すると、日本の病院チャプレンにおいては、「多数者」と「少数者」の逆転が起きていることがわかる。つまり、ここでは宗教的マジョリティは患者で、訪問者であるキリスト教チャプレンの方がマイノリティなのである。ここでは、患者の側から、ほとんどの場合「異教徒」であるキリスト教の牧師が受容される形で、チャプレンの活動がなりたっているということになる。

#### 患者サイドに立つものとして

ハワイの病院と日本のキリスト教系病院とを比べると、平均的にみてハワイの病院の方が、かなり病院ボランティアスタッフの数が多いことがわかる。このことは日本のキリスト教系病院において（必ずしも「キリスト教系病院」に限ったことではないが）結果的に患者以外は、ほとんどが「医療者側」という状況を生み出していると言える。こうした状況の中では病院チャプレンは唯一と言っていいほどに、病院の中で「患者の側にたつて」ものを言いうるスタッフということが言えるのではないか。

### (3) 多文化共生社会における病院チャプレンの働き

#### チャプレンプログラムの充実

上述のように、ハワイの病院の状況と、日本のキリスト教系の病院の状況はその背景からして、かなり異なっている。しかしながら、いくつかの点でハワイにおけるチャプレンプログラムから学ぶ点も見えてくる。アメリカにおいては、「霊的ケア」の提供も病院の質を定める際の基準の一つとなっているが、日本においては「身体的」な治療の充実については云々されることはあっても、「全人医療」の概念が浸透しつつある現在でも、この「霊的ケア」に価値を見出す姿勢が行政側にも多くの病院にも見当たらない。今後我が国が多文化共生社会へと変貌を遂げた後にも、「身体的」な医療についてはある程度これまで通りの「モノトーン」での提供が可能であったとしても、ひとりひとりの患者の「全人医療」を考えたときには、数ある病院のスタッフの中であって、チャプレンはこの「多様性」に対応した「宗教的・霊的」ケアを提供できる存在となるのではないか。行政も個々の病院もこのことを真剣にとらえて、こうしたプログラムを（キリスト教であるかないかは問わず）検討する時期にきていると考えられる。

#### 多宗教への尊敬について

当初、アメリカでのチャプレン養成プログラムにも参加したことがある筆者は、基本的に「単一民族」の幻想をもっている日本社会にある病院チャプレンは、多文化共生について、ハワイの病院のチャプレンプログラムから、多くを学ぶべきであるという仮説をたててこのリサーチを始めていた。基本的にはその仮説をなぞるような研究成果となったが、イの で触れたように、日本の病院において、チャプレンはむしろ「宗教少数者」であり、多くの場合、「宗教的多数者」である患者から、その「他者性」「異質性」を受容されて、現場で患者と出会っていることに気付かされた。この点で言えば、実は日本のキリスト教チャプレンは、「宗教的多数者」として周辺の少数者の宗教者である患者を「受容」という、ある意味「上から下」を見下ろすような（決してハワイの個々のチャプレンはそのような発言はしなかったし、事実そのような姿勢ではなかったのだが）キリスト教世界にあっては、不可避な状況とは違った世界でその職務を行っているのだからわかった。つまり、日本のチャプレンは、その点においてすでに、「多宗教・多文化」に対する「受容体」を持っているとも言えるのではないか。これは今回の日米のチャプレンのありようを比較して見えてきた点である。

#### チャプレン教育プログラム

もちろん、上記をもって日本のチャプレンが、今のままで今後の「多宗教・多文

化」社会において、十分な「霊的ケア」の提供者となれることを意味しているわけではない。ハワイのチャプレンたちは、自分たちとは異なる宗教について「尊敬」を払っているといい、また、知識において他の宗教を十全に理解していた。このことは今後の日本のチャプレン養成プログラムにおいて不可欠となろう。例えばイスラム教徒に対して、彼らの宗教観、死生観、宗教的な慣習などについて、どれくらい現在日本の病院に従事しているチャプレンに知識があるであろう。こうしたことは養成プログラムの重要なカリキュラムの一つとして組み入れられていく必要があるだろう。

(4) 今後の展望

今回は最終年度に新型コロナウイルス感染拡大のために、全国に自粛要請が出て、そのために海外渡航や国内での移動が不可能な時期があった。それもあって、研究計画を予定通り終えることができなかった。また今回はグランデッドセオリーを調査方法の中核においたが、知識とスキルが十分に追いつかず、この調査方法を十分に展開することができなかった。今後は、この方法論をこうした実践神学的な調査に十分に活かせるように、その手法の習熟に努めたい。また、今後はハワイだけでなく、アメリカ本土（例えばカリフォルニア州）の病院に対する調査も検討していきたい。（以上）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 関谷直人
2. 発表標題 「いのち輝かせるために 今死と向き合おう -キリスト教から見た『いのち』『死』」
3. 学会等名 JR西日本あんしん社会財団 「2018年度第2回いのちのちのセミナー」（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 豪  (Sato Suguru)  (90150557)	同志社大学・心理学部・教授    (34310)	
研究分担者	木谷 佳楠  (Kitani Kanan)  (70707166)	同志社大学・神学部・助教    (34310)	